
ジェノサイドノート

M川

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ジェノサイドノート

【Nコード】

N0413L

【作者名】

M川

【あらすじ】

そのノートに苗字を書かれたものは、死ぬ、らしい。

「そのノートに苗字を書かれると死ぬよ」

「マジで？ デスノートみたいじゃん。ん、あれ、苗字だけで？」

「下の名前も、顔も知らなくても有効だよ」

「おー、高性能っていうかなんというか」

「ただし、その苗字の人間はすべて死ぬよ」

「む。影響大きすぎるそれは」

「大量虐殺。ジェノサイドノートだよ」

「迷惑なノートだなあ」

「あげるよ」

「いや、貰ってもなあ」

「君が要らないなら他の誰かにあげるよ」

「それもなんかやだなあ。僕の苗字鈴木だしなあ。巻き添えで死にそうだなあ」

「貰ったからって代償があるわけではないよ。使いたくなければ使わなければいいよ」

「そうか。うん、じゃあ、まあ、貰っておこうかな」

「あげるよ」

「うむ」

さて、貰ったはいいもののどうしよう。

このまま使わずに、どこかに隠しておこうか。

それとも、燃やしてしまおうか。

あるいは、うまいこと使いこなして、新世界の神となってやろうか。

とりあえずさしあたってするべきことも見つからないので、テレビをつけてみる。

臨時ニュースがやっていた。

白昼の凶行。ライフルと鎌を持った男が保育園に乱入した立て籠もったらしい。

沢山の小さな子供が人質に取られている。

犯人の顔に見覚えがあった。中学生のころクラスメートだった鈴木君だ。

どうしよう。鈴木だ。鈴木君だ。どうしよう。

このノートに、鈴木、とかけば、子供たちは助かるかもしれない。でもその時僕は死ぬ。

世界中の鈴木さんも死ぬ。

人質の中にも鈴木君がいるかもしれない。きっとひとりくらいいるだろう。

だめだ、ノートは使えない。犠牲が大きすぎる。でも、だけど、それでも。

「おやおや、人間が困っているよ」

「あ、あんたまだいたのか」

「何をそんなに困っているのか僕は疑問に思うよ」

「この鈴木君を殺したいけど他の鈴木君達には死んでほしくないし僕も死にたくない」

「なるほどそういうことなんだねわかったよ」

「何が分った」

「君がなんで困っているのが分ったんだよ。それだけだよ」

「何かいい方法はないか」

「君が最良だと思った方法をとればいいよ。僕は誰の味方でもないよ」

「薄情だな。人の命がかかってんだぞ。もしかして死神とかか？」

「ちがうよ。ただの『人間以外』だよ」

「僕が死なずに、他の鈴木さんたちも死なせずに、あの鈴木君だけを殺す方法はないか？」

「拳銃で撃ったりナイフで刺したりすれば良いと思うよ」

「無理だ僕には。拳銃は持ってないし、ナイフを持ってあそこに行くだけの時間もないし、そんな度胸もないし」

「だったらことの成行きを見守るしかないよ」

「そうだけど、そうなんだけど、でも」

「あの鈴木君の苗字を変えてしまえばいいと思うよ」

「そんなことは不可能だ」

ん、苗字を変える、か。

僕が誰か、鈴木さん以外の家、例えば、田中家の婿養子に入れば僕は田中になる。

そうすれば僕自身は安全圏で鈴木君を殺すことができる。

でも、沢山の鈴木さんたちが死ぬことには変わりがない。

それに、奇跡的に今この瞬間に結婚相手を見つけたとしても、婚姻届の受理には時間がかかるだろう。

無理だ、この方向性ではなにも解決できない。

現実的に考えろ。

分るだろう？

現実的に考えれば。

僕が、誰も、救えないことくらい。

「とうとう人間が諦めたように見えるよ」

「正直詰まれた気分だ。成す術なし。成り行きを見守るしかないさ
そうだ」

「それは誰も救わず誰も殺さないということだよ」

「そうだ、もともと人間はこんなとき、誰も救わず誰も殺さない」
「それならば人間とはつまらないよ」

「そうだ、人間はつまらない。『人間以外』ならこんなときどう
するん」

「おや、テレビを観てごらんよ。動きがあったみたいだよ」

鈴木君はひとりの、おそらく保育士さんだろうと思われる、女性を鎌を持った左腕で抱きかかえ、首筋にその鋭利な先端を突き付けていた。

その女性に、その女性の顔に、見覚えが、あった。

「あれ、は、高橋、さん……？」

中学生のころ。

目立たない少年だった僕は、いじめっ子でもいじめられっ子でもなく、スポーツ万能でも勉強が得意でもなく、文化祭や合唱コンクールなどの際には協調性は欠かないものの積極性には欠けていて、かといって物事に取り組むやる気のなさを問題視されるほど消極的だったわけでもなく、髪も染めずタバコも吸わず、生徒会には入らずボランティア活動には関わらず、試験勉強はダラダラと非効率に続けた結果最終的には一夜漬けで、赤点を取らずかといって成績上位にもならず通知表は3がほとんどで、趣味は読書とゲームとインターネットで、特技は平たい石を投げて水面を跳ねさせることで、好き嫌いは特にないけど強いて言うならカボチャの煮つけがあまり得意ではなくてかといって食卓に出されれば特に残したりはしなかったこの僕が、唯一注目された事件があった。

14歳だったある日、僕の机の中に小さな箱が入っていた。薄緑色の包み紙にピンクのリボンでラッピングされた、小さな箱だった。僕はそれを手にとって何だろうとしばらく眺めていたが、その日がバレンタインデーだということに思い至ると、あわてて机の奥に押し込み、他人目に触れないように隠したのだった。

休み時間に入るや否や、僕はその小包を上着の内側に抱え込むように隠し、男子トイレの個室に駆け込んだ。誰にも知られなくなかった。音をたてないように慎重に包装を解き、その中身が確かにチョコレートであることを確認した。誰からだろう。手紙の類は入っていないかった。チョコレートは市販のもので未開封。包み紙の裏な

んかも改めてみたが、特に誰からのメッセージが書かれていたわけでもなかった。

それでもチョコレートを買ったという事実に興奮し、胸を高鳴らせていたのだが、次第にこれは誰か馬鹿な男子の悪戯なのではないだろうかという疑念が心の中を浮かび上がってきた。考えれば考えるほど、そんな気がしてきたが、しかしその一方で、悪戯ならむしろ女子を装った手紙の類を入れるのではないかという気もしていた。結局何一つ確証を得ることはできず、ただ誰かからチョコレートを貰ったというフワフワとした事実のみを胸に僕はトイレを出てチャームが鳴ったので小走りで教室に戻った。

ひとりの女子と目があった。彼女は高橋さんという。下の名前は憶えていない。僕と同様、なんの特筆事項もない、ただの女子だ。もしかしたら、このチョコレートをくれたのは、高橋さんかもしれない。

なんとなく、僕はそう思った。

普段クラスメイトが高橋さんや僕に注目しないのと同様に、それまで、僕も高橋さんのことを考えたことは今まで殆どなかった。いや、一度もなかったといってもいいかもしれない。

彼女は、どうやら勉強はまあまあ出来る方だったようだけれど、授業で積極的に手を挙げて発言するようなタイプでもなかったし、ダントツで成績がよかったわけでもない。「なんとなく」な成績上位陣というだけのこと。

人付き合いが悪くて孤立していたわけでもないのに、他の没個性な女子の中に埋もれてしまって、その没個性ささえも際だつことはなかった。まったくもって、僕と同程度の普通さを持った女子だったのだ。

あらためて彼女の顔をよく見てみる。見れば見るほど普通だ。水のように、空気のように、ニュートラルというのか、非常に無難な顔立ちをしていた。

不美人というわけではない。顔の各パーツの形や配置に何ら違和

感はないのだけれど、なんというか、表情に乏しい。それは決して、笑ったり不機嫌になったりしない、という意味ではない。

要するに、「地味」なのだ。

その一言につきる。

なるほど、考えてみれば、市販のチョコレートを贈るという好意の表現としては非常に地味な行いは、彼女の無色な特色にあっているような気がする。ここで手の込んだ手作りチョコレートに、豪華絢爛なラッピング、ハートマークなどのちりばめられた丸文字のラブレターが添付されていたら、それはもう高橋さんであるはずがない。

地味だからこそ高橋さんなのだ。普通だからこそ高橋さんなのだ。面白味がないからこそ高橋さんなのだ。

しかしながら、その彼女が僕に好意をよせているとなれば、話は別で、とたんに彼女のその没個性さがかえって愛おしくなってきたのだ。非常に慎み深く、慈愛に満ちた表情にさえ思えてくる。

良いじゃないか、地味でも、普通でも、没個性でも。社会にでたときに本当に役に立つのは、きっとステルス迷彩のごとく周囲に埋没できるその能力だ。出る杭は打たれるとも言うし。目立ったところで、良いことなんてあまりない。いや、正確には、目立てば目立つほど人から好かれる可能性はあがるが、同時に人から嫌われる可能性も増えるということ。沢山の人に嫌われれば、それだけ足を引っ張られることも多くなるだろう。落ち目になれば好いてくれた人でもきつと立ち去るに違いない。

そう考えると、彼女のこのなんの面白味もないパーソナリティが非常にすぐれたものののように感じられるようになってきた。

気がつくと、僕は高橋さんのことを見つめていた。

きつと、その瞬間から僕は恋に落ちていたのだろう。

初恋、だったかもしれない。

コロリ、と。

ぼーっとしていたのだろう。僕の上着のすそから、雑に包装されたチョコレートが転がり落ちてしまった。

慌てて拾おうとするが、目ざとい男子に見つかってしまいはやし立てられる。未だかつてないほどに注目を浴びた僕は、中途半端なニヤニヤ笑いを浮かべて、シラを切り通した。

「すげー、モテモテじゃん」「誰からもらったんだよ」「うわ、包装紙シワシワじゃん」「バレンタインシーズンじゃなくてもコンビニで普通に売ってるよなこのチョコ」「っていうかあいつなんて名前だっけ、鈴木？ 初めて知った」「ずるいぞ、俺にも一口くれよ」「まじうぜえ、ヘラヘラすんな、死ねよ」「あんなやつクラスにいたっけ」「俺あいつと話したことないや」「そもそもバレンタインってのはチョコレート会社が」「毒入りとかだったら面白いのに。爆笑なのに」

騒ぎの仲、チラリと僕は高橋さんの方を伺う。周りの女子が皆、こちらに注目する仲、高橋さんはうつむいて自習をしていた。まるで、何事もなかったかのように。あたかも、周囲の喧噪などとは無関係のように。でも、この場合はむしろこちらに注目するのが自然なこと。その無関心さこそが、このチョコレートの送り主が高橋さんであるという状況証拠に他ならなかった。

これが、僕の中学校生活において、唯一クラスメイトの注目を集めた出来事だ。

それから、僕は毎日高橋さんにあうのが楽しくて仕方なくなった。会うといっても、別に今まで通りの関係性で、会話なんて一切なかったけれど。

でも、僕は彼女と一緒にの教室にいられるだけで、妙に胸が高鳴るのだった。この瞬間、もしかしたら高橋さんも僕のことを考えているのかもしれない、と思っただけで、もう授業になんて集中が出来るわけもなかったのだ。

ごくまれに、高橋さんと目が合うことがあって、その度に、ああ

やっぱり彼女が僕を好きなのは間違いないところだと確信を強めるのであった。

だけど、高橋さんから僕に話しかけてくることは決してなかった。もちろん、僕の方から話しかけたことも、一度だってないのだけれど。僕は気長に待つことにした。彼女が僕に告白してくるのを。

当時は認められなかったことだが、今ならわかる。

結局僕には自信がなかったのだろう。

自信があるなら、僕の方から告白してしまうべきだったのではないだろうか。相思相愛なことを確信してるのだったら、さっさとそうすれば良かったのではないだろうか。要するに、その瞬間瞬間では確信に至るまでに舞い上がることができても、その瞬間が過ぎ去ってしまえば、すぐに自信がなくなってしまうのだ。なんて揮発性の高い自意識だろうか。

告白して、実は勘違いでした、彼女は僕のことなんか好きでも何でもありません、むしろチラチラこちらを見ていてなんか気持ちの悪い人くらいに思っていました、なんてことになったら、おそらく登校拒否にでもなっていたのではないだろうか。そして、その自信のなさゆえに、僕にはその可能性が捨てきれなかったのではないだろうか。

だけど、4月になって僕たちが3年生に上がったとき、僕と高橋さんが同じクラスになったときは、運命めいたものを感じたりもした。

そしてついに、僕と高橋さんが言葉を交わす時が訪れた。

卒業を間近に控えた、修学旅行の前日。すべての授業が終わった後のホームルームでのこと。

その日、日直だった僕は、旅行の際の注意事項などが記されたプリントを配っていた。先頭の席の生徒に、その列の人数分渡して、後ろに回してもらおうという、凡人にしか到底不可能と言わざるを得ない、きわめて重要な役割である。

ところが、先生が間違えたのだろうか、1枚だけプリントが足り

なくなってしまったのだ。教室の前から見て左側の列から順に配っていたため、足りなくなっただのは右端の列の一番後ろの生徒だった。それが高橋さんだった。

高橋さんの前に座っていた男子生徒が、「1枚足りないんだけど」と言った。

先生が「ごめん、じゃあ鈴木君、隣のクラスに行って、余ってたもらってきてくれる」と言った。

僕は「あ、はい」と今年一番に普通な返答をして教室を出る。果たして隣のクラスではプリントが大量に余っていたので、1枚もらい、自分の教室に戻る。その際に、前の扉から入らず、あえて後ろの扉から入ったのだ。

これは非常に緻密な計算に基づいた行動なのである。

なぜならば、前の扉からは言ったならば、右端の一番前の生徒にプリントを渡して後ろに回してもらうのが自然になるのだが、後ろから入ることによって直接高橋さんにプリントを渡すというこの愛に満ちた行為が、非常に違和感ない形で行えるようになるのである。

僕は「もらってきた」と馬鹿のような台詞を口にしてプリントを渡す。そして、高橋さんは「ありがとう」と女神のように地味なお礼を口にして張りぼてのような笑顔でうなずくのであった。

これが彼女との初めての会話であった。

さて、その後、僕は何事もなく中学校の卒業式を迎えることになった。あの日以来、結局、高橋さんとは一度も言葉を交わすことはなかった。修学旅行でも、自由行動で僕は偶然班からはぐれてしまい途方に暮れ、しかたなく京都の町中を徘徊している際に、おなじくはぐれてしまった高橋さんと遭遇してなんだかんだあってふたりつきりで京都の町を散策することになる、という妄想に耽ったりもしたけれど、そうはならなかった。ただし、僕が班からはぐれて途方に暮れたところまでは実現したのだから、あながち非現実的な妄想だったというわけでもないのかもしれない。きっと、ほんのちょ

つと、運が悪かったただけだ。

それから接点もなく、卒業式だ。

それでも僕は希望を捨ててはいなかった。卒業式の後というのは、告白のベストタイミングであるということは、これはもう世界の、否、宇宙の常識と言っても過言ではないのではないかならうか。だから僕は待った。卒業証書を片手に、誰もいない教室に立ち尽くした。クラスメイトたちがみな下校し、各々カラオケなんかにかける中、僕は教室で、窓枠に背中を預けて、ただ、立っていたのだ。

そしてドアが開く。

「あれ、君なにしてんの」

警備員のおじさんだった。

僕は後頭部をマッハでかきむしりながら、「あ、いや、えーと忘れ物しちゃって」と言っただ。

おじさんは、「そろそろ閉めちゃうよ、鍵」と言っただが教室から出るのを促した。なんという極悪非道なおじさんだろう。僕と高橋さんの仲を引き裂くために大魔王から派遣されてきた遣い魔に違いないと思っただ。

僕は「すみませんもう大丈夫です」と不明瞭な発音で呟いてイソイソと教室を出る。僕がその場を立ち去ろうとしたとき、おじさんは「卒業おめでと」と言っただ。良い人だった。泣きそうになっただ。

あのチョコレートをくれたのは、誰だったのか。なにも明らかにならなかった。高橋さんかもしれないし、他の女子かもしれないし、男子のいたずらかもしれない。

答えが出なかったことがかえって良かった、なんて到底思えないけれど、勘違いで恥をかくよりは全然マシなのだと思暗示のように思い続けることにした。

それがどんなに心残りであろうと、月日は、時間は、誰にでも平等に流れる。僕は平均的な高校に普通に入り、一般的な高校生活を

経て、なんの波乱もなく卒業をして、学力に見合った大学に入り、皆と同じように怠惰に過ごした。

そして大学生活も終わり、僕は中流企業に入社し、そして今に至る。

僕は高橋さんの存在を忘れ、日々受動態の出逢いを求めて呼吸をしながら地味に生息していたのだ。

でも、今、テレビの中で高橋さんは極限状態のピンチに陥ってる。高橋さんをそんな目に遭わせているのは、僕と同じ苗字を持つ鈴木君。

鈴木君はどんな生徒だっただろうか？

よく思い出せない。僕よりは目立つ少年だったように思う。クラス不良グループに属しながらも、オタクグループともつきあいがあった、少なくとも僕なんかよりは目立つ存在だったように思う。短気で、すぐに怒鳴り声を上げて小突き回し、クラスの小さな男子を萎縮させるサディスティックな一面があったようにも思う。でもそれだけだ。僕は鈴木君と仲良く話したこともなければ、虐められたりもしていない。

彼のことは好きではなかった。

でも、敵意を抱けるほどには、興味もなかったのだ。

こんなどうでも良い奴に、僕の大切な高橋さんを殺されるのは我慢がならない。

ちくしょう。

死ね。

死んでしまえ。

これがデスノートだったら、僕は鈴木君の下の名前を知らないの。卒業文集を掘り出して調べたうえで、何のためらいもなく名を記してやることだろう。そしてきつと僕は後悔する。人を殺した罪悪感に苛まれる。心が壊れて、自殺でもしてしまうかもしれない。だけど、それでも僕は間違いなくやるだろう。

さて、これはデスノートではない。ジェノサイドノート。彼だけ

を殺すことは不可能な、強力にして極めて不便な大量殺人兵器。全国
の鈴木さんを巻き添えにして、そして僕も、死ぬ。

それでも良いかな、と僕は思った。

僕がかつて恋い焦がれた高橋さんを救うためならば、見ず知らず
の鈴木さんたちを巻き込み、その代償に僕が死ぬのも、まあ、あり
なんじゃないかな、と思うのだ。

もちろん、これは許されるはずもないことだろう。

だけど、それでも。

ごめんね、全国の鈴木さん。

僕と一緒に、死んでくれ。

僕はペンを取った。

不意にざわめく。

パン。

破裂音がした。

「おやおや、君が絶望している間に出来事は起承転結の転をむか
えているようだよ」

『人間以外』が面白くなさそうにつぶやく。

僕は画面を見る。なにがあったのだろう。

まさか、高橋さんが。

そんな、まさか。

倒れていたのは、鈴木君だった。

頭から血を流して、地面に倒れていた。

高橋さんは、顔を覆ってうずくまっている。

どうやら、狙撃されたようだ。

どうやら、射殺されたようだ。

どうやら、全て終わったようだ。

僕はペンを放り投げる。

なんだ、結局そうなんだ。僕なんかの出る幕は、ないということなのだ。こんなに強大な兵器を手に入れたところで、どんなに恐ろしい力を身につけたところで、所詮僕は僕でしかないということなんだ。

普通で地味で矮小で。

姑息で小心で無害で。

どこまでも無個性で。

だからこれでいい。高橋さんは助かった。鈴木君は死んだ。僕も死なないし、全国の鈴木さんたちも巻き添えを食らうことはなくなっただけだ。

これが最善じゃないか。

これが僕が望む形での結末じゃないか。

これがベストエンディングじゃないか。

でもなんだろうか、この虚無感は。

自らの命を捨ててまで世界に干渉する覚悟をしたとたん、こんな落ち着くべき形に落ち着いてしまった、この脱力感は。

僕は自分の顔を触ってみる。

ニヤニヤとしただらしない形に歪んでいた。

安寧仕切ったさぞかし不細工な笑顔だったことだろう。

続報で、僕は人質にとられた女性が高橋さんとは全く別人の鈴木さんという保育士さんだったことを知る。

そして、射殺された籠城犯が、鈴木君でもなんでもない見ず知らずの男だったことも知る。

もしもあのとき、僕がノートに名前を書いていたら、無駄に僕が死に、鈴木さんたちを殺したあげく、無関係なかつてのクラスメートの鈴木君を殺し、さらにあの保育士さんまで殺していたことにな

る。

だから、僕のやろうとしたことは、全てが間違っていたということなのだ。

「僕は、とんでもないことをやろうとしていたんだな」

「そうでもないよ」

こいつは、この『人間以外』は、そんなことを言った。

「だってだよ。このノート、なんでもなかったあのノートなんだよ」
「え」

「ジェノサイドノートなんて嘘っぱちだよ。そんなものがあるわけないんだよ」

「何だって」

「軽いイタズラなんだよ。ドッキリともいうよ」

「おい、お前」

「君がノートに『鈴木』と書いたところで、なにも起こりはしなかったんだよ」

「ふざけるな、殺すぞ」

「殺されるのはイヤだから僕はこれで退散するよ」

「おいまて、不法侵入で警察に……」

『人間以外』は、窓を開けて飛び出した。ここは二階。まあ飛び降りても死にはしないだろうが、でも危険なことにはかわりがない。窓の外に身を乗り出してみる。すでに『人間以外』の姿は見えなくなっていた。

もしかしたら本当に人ならざるものだったのかもしれないな、と思った。そうでも思わないと、自分が哀れでしかたがなかったのかもしれない。

僕はため息をついて、舌打ちをした。

窓を閉める。

少しでも泣いてみた。

それからしばらく月日の流れたある夏の日のこと。

中学時代の同窓会の誘いがきた。

クラスメート全員に誘いがかかっているらしい。

もしかしたら高橋さんもくるかもしれない。

僕はペンととって、行こうか行くまいか逡巡する。

あの忌々しいノートは机の奥にしまっている。

憂さ晴らしに適当な苗字を書いてみようかとも考えたけれど、あの『人間以外』の立ち去りかたに、たしかに人間以外の何かを感じないでもなかったのだ、バカバカしいとは思いつつも、万が一、という恐れが拭いきれなかった。かといって捨てるのも何となく躊躇われたのだ。

もしかしたら、今後、僕にとって命よりも大切な何かを誰かに壊されそうになったら、その時は名前を書いてみるかもしれない。

あの『人間以外』にだまされたと、本当に気づくのは、その時まで保留にしておこうと思う。

カチリとペンの頭を押して、御出席の御を線で消したあと、そこに丸をつけた。

行ってみることにした。

まあ、僕のことだ、そこで何がおこるわけでもないのだろうけど、だけど、それでも。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0413/>

ジェノサイドノート

2010年11月23日06時51分発行